

「ちくま日本文学 全集23 夏目漱石」

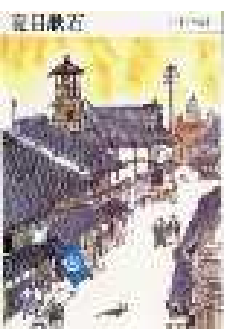
夏目 漱石著

夏目漱石、太宰治、島崎藤村、川端康成・・・お馴染みの作家の作品は、教科書にも載っていたため、最後まで読んでいたと思いきや読んでいませんでした。しかし、今回改めて読んでみて、思っていた内容と全く違うことに愕然としました。

特に本書、夏目漱石シリーズの冒頭に収められていた「坊っちゃん」。「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている・・・」で始まるお馴染みの作品ですが、私の認識の中では、熱血漢の坊っちゃんや愛媛県松山市に教師として赴任し、悪戦苦闘しながらも生徒たちと心を通わせる。好きな女性（マドンナ）とのほのかな恋物語もあり、松山での生活を楽しむ、と思っていました。実際は、特にならなかつた訳でもない教師になり、希望していなかった松山に赴任。狸のような校長に赤シャツの教頭、唯一心を通わすことが出来た山嵐に英語教師のうらなり・・・。うらなりの元婚約者、マドンナは、清純な乙女ではなく、お金がある赤シャツになびきかけている。松山の生活に辟易し、早く東京に帰りたいとホームシックになっている坊っちゃんの描写に、逆に、私は坊っちゃんの中にある人間臭さを感じました。誰でも人の好き嫌いはあるだろうし、里心も付く。落ち込み、悩み、そして正直な坊っちゃんを通し、夏目文学を身近に感じました。

本書には、他に「吾輩は猫である」「夢十夜」「思い出す事など」「私の個人主義」の4編が収められています。

智保



筑摩書房

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞